

阿部 善彦 ほか 著

『古代キリスト教の女性
——その靈的伝承と多様性（教父と相生）』

（教友社、2022年）

後藤 里菜
GOTO Rina

本書は、古代末期を中心に広く「キリスト教世界の女性」について、靈性をふくめた実像を捉えようと試みたものである。編者の宮本久雄氏を筆頭に「相生（相生かし相生かさされ相生く）に向けて多彩な智慧を発信し発言」（本書5頁）している優れた執筆陣を揃えた意欲作である。

山田順氏は「古代末期のローマにおけるキリスト教救貧慈善活動」において、古代文献資料には登場しないキリスト教オラトリオ（小礼拝堂、祈祷所）の遺跡について、発掘調査と考古学的知見にもとづく分析を披露している。また、元来多神教世界であったローマの中核であるパラティーノの丘と、あらたなキリスト教世界の拠点であるラテラーノ地区との間に位置するチェリオの丘に着目し、多様な側面から人的関係に焦点を当てることで、初期のキリスト教化プロセスとそこに見られる「協働体」（7頁ほか）の実像をあぶり出すことに成功している。

ローマ世界の高貴な家柄の女性たちが古代末期、キリスト教の影響下で救貧活動に積極的に関わった点は、管見の限り中世の同女性のそうした活動からの撤退と靈的な施しへの移行から把握していたことであったが（参考：J. McNamara, “The Need to Give: Suffering and Female Sanctity in the Middle Ages,” in *Images of Sainthood in Medieval Europe*, Ithaca: Cornell University Press, 1991, pp. 199-221）、当該論文はその実例をふくむもので、たいへん興味深かった。

また、獅子の洞窟のダニエル図にわざわざ預言者ハバククが描かれたことについて、聖餐の意味や神の恵みに預かることの意味を孤児院の子供にも理解できる易しきで示したのだ、とする山田氏の見解は示唆に富むとともに、本書の主題である「女性」のみならず「子供」への関心を喚起するものであった。キリスト教世界での子供の扱われ方の歴史の中に位置づけてみることで、さらに広い展望が開かれるのではないだろうか。

足立広明氏の「神と向き合う私」は、聖書外典『パウロとテクラの行伝』に関して先行研究をふまえ、近年のエージェンシー理論にも依拠することで、同外典が編まれ、また女性信徒に広く好まれた事実を、より適切な歴史的な文脈に位置付けようとしたものであった。

同外典は、よりおおきな外典『パウロ行伝』の一部をなし、かつその残存部分の大半を占めることから重視されてきたが、多くの偏ったフィルターを通してのみ考察されてきたきらいがあるという。なお、エージェンシー理論とは、特定の規範や権力構造に埋め込まれ、あたかも主体性などまったくないように思われる存在（この場合には「女性信徒」）であっても、決められた規範の中でむしろ、主体的に選択し行動している点に着目しようとするものである。何にも規定されない自立した主体というのがそもそも幻想であり、いかなる規定の中でどう行動しているかを見極めることに重きを置く同理論は、たしかに汎用性が高い。

テクラは長らく、父権制社会への抵抗者、かつ、そこからの自立をめざし婚約者や家族を放棄した独身修行者として捉えられてきた。だが、当該外典には、ローマの権威に反抗する様子が見られないばかりか、権力者側はテクラにむしろ同情的である。権威への抵抗と自立はこの場合、時代背景にそぐわない。テクラはイエス・キリストへと向かってゆく慎み深い女性信徒の模範としてこそ、支持されていたのである。父権制社会という規範の中でテクラがとった選択について、より説得的な道すじを示した実り多い論考であった。

山田望氏の「女性の尊厳と自由意志」もまた、研究史を正確に把握した上で、より公正な史料読解にもとづくペラギウス派の思想内容を明らかにし、

さらには東西キリスト教思想の重要な分岐点の一端を再確認させてくれるものであった。

ペラギウス派の人々は古代末期の西方ラテン世界において、唯一と言えるほど顕著に、女性信徒の存在を尊重していた。そして彼らは「自由意志」をそのとっかかりとして考えていた。だが異端の烙印を押され排斥されてしまう。

ペラギウス派を葬るきっかけを与えた一人にアウグスティヌスがおり、彼はペラギウス派が、女性の自由意志を、ただ彼女だけから出たものとみなしている点を批判する。しかし、山田氏の述べる通り、ペラギウス派の主張を素直に読めば、自由意志が彼女らのみによると主張しているとはとうてい解釈できず、神とのつながりをこそ重視しているのは明白である。

異端とされた人々の主張について、その一部のみを拡大解釈するのはキリスト教史の典型で、アウグスティヌスの見方のみが狭量であったとは言えない。むしろ敢えて狭量になることで、見過ごせない違いを指摘しようとしたことのほうに重点があろう。当該論考ではその点、陣痛解釈を取り上げ、原罪にかかわる見解の相違をくつきりと描き出している。なお、ペラギウス派は西方ラテン世界では異端とされたものの、思想内容を分析するとアウグスティヌスよりもよほど初期キリスト教の正統の流れを汲んでいるという。つまり、アウグスティヌスの陣痛と原罪の伝遺の解釈こそが新奇で、東と西のキリスト教思想のおおきな分岐点になったとさえ言えるのである。この指摘の意味するところはおおきい。

陣痛の身ぶりは、神話的にイヴの原罪を思い出させるきっかけであるだけなのか、それとも、陣痛を体験する女性がまさに罪を負っていることのしるしであるのか。後者を主張したアウグスティヌスの解釈は、その後の西洋中世の女性観の基本線を形作ってゆく。

アウグスティヌス自身、自らの性欲と戦い苦しんだ人物であるとされるため、評者としては、原罪の罪深さがすべての女性にも伝わるとの見方は、その個人的苦難から抜け出すための道すじを、神に祈りながら必死で追い求めたからこそ、結実し得たものであるように思われてならない。かように私的

な思考の展開がその後の長きにわたる女性観を左右したのだとすれば、彼の思想と信仰の力強さに首を垂れるほかないが、あらためて、東西キリスト教の間の隔たりを実感させられ興味深かった。

阿部善彦氏の「西方キリスト教世界における女性霊性についての試論」は、ここまでの論者とはやや毛色が異なり、西方キリスト教世界で研究史上取り上げられる「女性神秘家」とはいったい何なのか、彼女らの姿をより忠実につかまえたいと願う者はいかなる態度でのぞむべきなのかといった、大変重要だが、史料上の困難ゆえ正面きって取り上げられることのなかった問題と対峙する稀有な論考であった。

西方キリスト教世界の「女性神秘家」は必ずしも「女性作家」ではないが、「女性作家」としての彼女らに焦点を当てる場合にもそこにはバイアスがあり、同時代の男性聖職者など支配者階級の男性たちに利用されている側面が強いため、その歪みを適切に考察すべきだというのは、歴史研究者に広く共有される見解である。それは至極もつともなものとして受け入れた上で、阿部氏が本論考をつうじて切実に語りかけたような、「彼女たちを、神との関係において生きたその生においてあらわにする」（185頁）ものがその著作においてほかにありえないということは、けっして軽視してはならない事実ではないか。

つまり彼女たちは、その著作に全力を持つてのぞんでおり、そのほかについては彼女ら自身が敢えて度外視している。そこでその著作とのみまっすぐに向き合うことは、彼女らが置かれた歴史的文脈を無視することと完全に同義ではない。むしろそのときわれわれは、著作以外を度外視する彼女らと同じ姿勢で、その生に忠実に寄り添っている。この事実を忘れてはならない。末尾のヒルデガルトの『スクヴィアス』の試訳ではまさに、真摯にその姿勢をとる訳者によって、神の声を受け取り書くことへと駆り立てられていったひとりの女性神秘家の姿がいきいきと浮かび上がるようで、読む者は感慨を禁じ得ない。

「おわりに」で鶴岡賀雄氏は、あらためて、人間学としてのキリスト教研究の意義を問うている。鶴岡氏が述べているとおり、イエス・キリスト自

身は、「性別」による「差異」をとりたてて云々しているようには思われな
い。性別にかぎらず、人間を規定するあらゆるラベリングを剥がしていつた
のがイエスであろう。他方で、性自認（特定の性自認がない、という自認も
含め）は人間の自己認識の中で欠くことのできない過程にある。「性自認の
深みへの問いは人間一般の自己意識の深淵への問いに導いていく」（204頁）
と述べられる通りである。

イエス・キリストは、それまでのユダヤ教徒の中で当たり前であった律法
を前提とした世界ではなく、神の愛にもとづく世界のありかたを神の国とし
て宣べ伝えた。ところで、その神の愛による世界（神の国）では、存在のあ
りかたそのものがあたらしくされ、あらゆる人間がその世界なりの自分を見
いだすよう促されるのだが、ここには、人間存在の基盤のおおいなる転回が
ある。そしてこの転回に際して、女性は登場すべくして登場したのではない
だろうか。たとえば女性が典型的には弱い者、受け身的で状況にさらされが
ちな者であったことから、そうした者の隣人となったり、そうした者自身へ
と自らを寄せてゆくことこそが、神の国に住まう者のとるべき姿勢の原風景
であるように思われるのである。

他者を自己とおなじ人間として真に受け止めること——それはわれわれ誰
しもにとっての生涯にわたる課題であり、イエスはそれを為しながら説いた
のではなかったか。本書はまさにキリスト教世界の女性に対し、その試みを
実践したものに感じられた。実り多い本書がより多くの人の手に渡るよう祈
りながら、評者も一女性として、人間として、今後もより深く、キリスト教
と向き合っていきたいと感じた。

（川村学園女子大学非常勤講師）